

ジャズトランペッター

原 朋直 さん

今回は、日本を代表するジャズトランペッターであり、2001年公開の映画「ブラザー」（北野武監督）のサウンドトラックでは、オープニングとエンディング・テーマを演奏された原朋直さんにお話を聞きました。誌面の都合で楽しいお話のほんの一部しかお伝えできないのが本当に残念です。

（聞き手・構成：鹿野 真美）

人が「いい」と言ったから
「いい」と思うのではなく、
自分の心で判断してほしい。
そのほうが絶対に楽しいですよ。



——まずは、トランペットとの出会いから教えてください。

小学校1年生のときに、小学校の朝の全校集会で上級生の鼓笛隊が「こんにちは、トランペット」という曲を演奏しているのを聴いて、体に稲妻が走りました。言葉ではうまく説明できませんが、とにかくトランペットが吹きたくてたまらない気持ちになったのです。

ただ、小学生の頃は野球もずっとやっていましたし、中学校では生徒会長をやっていたので生徒会活動のほうが楽しくて、トランペット一筋、というわけではありませんでした。

——ジャズとの出会いは？

高校2年生の終わりくらいです。吹奏楽部の卒業生で大学に行ってジャズをやっている人がたまたま遊びに来て、ぼくの音を聴いて「君の音色（おんしょく）は、ジャズという音楽にすごく向いている」と言ったんです。そして、いくつかジャズのレコードを教えてもらって、すぐに買いに行きました。

——そのときに買ったレコードは覚えていますか。

クリフォード・ブラウン（ジャズトランペッター、1930～1956）の「コンプリート・パリ・コレクション」

です。レコードジャケットの帯に「ジャズはマイルス・デイビスがトランペットの代表と思われるが、実はクリフォード・ブラウンが最高の演奏家である」というようなことが書いてあって、「そうか、この人が世界で最高に素晴らしい音楽家なんだ！」と思って家で聴いたのですが、さっぱりわかりませんでした（笑）。当時やっていた吹奏楽の演奏では間違えないことが大切でしたから、アドリブの部分も、「なんだ間違えてばかりじゃないか」と（笑）。

でも、ぼくは人にトランペットを褒められたことがそれまで1回もなかったもので、これがひとつのきっかけになってジャズに対する興味も出てきて、文化祭ではジャズのコンボをやりました。全10曲、各パートの音をそれぞれ聴きとって譜面に起こして演奏して、とても楽しかったですね。

——音楽大学へは進まなかったんですね。

高校2年生の頃になると、音楽の方面に進みたいという気持ちが強くなり、毎朝6時20分には学校行っ

それで養護教員になろうと思って、愛知県の日本福祉大学に進学しました。

——それが最終的にはジャズミュージシャンに…。

大学でジャズ研究会に入ったのですが、ジャズどころか音楽のビギナーの集まりという感じでした。ぼくは高校のとき、文化祭用に、持っているジャズのレコードからコピーして10曲くらいマスターしていたので、そのうち完璧に覚えているのを吹いたら、「すごい！天才が来た！」と（笑）。それがまたたくまに名古屋のジャズ研究会中に広まって…。その頃、名古屋ではプロのジャズミュージシャンの中でトランペッターが1人もいない状況だったのです。1年生の冬頃、トランペッターを探していたピアニストの人にぼくを推薦してくれた人がいて、初めて人前で演奏してお金をいただくという経験をしました。この経験が転機になったのだと思います。

卒業後の進路は、4年生のゼミ合宿のときに教授から言われた「もし、福祉の仕事をするなら今すぐトランペットを止めなければだめだ。君はトランペットを止められるか？」という言葉が決定打となって、ミュージシャンの道を選びました。

——国外のミュージシャンとの共演も多いですね。

国外ミュージシャンと一緒に演奏する機会をいただいたことは、ぼくの音楽に非常に大きな影響を与えています。国外のミュージシャンの音楽にかける情熱にはものすごいものがあります。持てる情熱のすべてを音楽に注いでいる結果、音楽もすごいことになっている、と言うのでしょうか。そういう人たちと一緒にやっていると、「自分もがんばらなくては」「さあ、次は何をしようか」という気持ちになります。

また、クラシックを実際に演奏する機会をいただいたことも大きいです。ジャズとクラシックとでは使う脳みそが違うのでゼロからクラシックの奏法を勉強しましたが、それが非常に役に立っています。

——演奏活動などを通して伝えたいことは何ですか。

ぼくは、創作活動をしている人間は変わっていかないといけないと思っています。ぼくは、たとえ「お前、変わったな。がっかりしたよ」と言われたとしても、自分自身が納得しての結果であれば嬉しいです。



そういう風にならなくていい人たちが創っているものは、刺激があって、美しく、心を癒してくれると思います。それを人が「いい」と言ったから「いい」と思うのではなく、自分の心で判断してほしい、というより、自分の心で判断したほうが絶対に楽しいですよ、ということ伝えたいですね。

——最後に、弁護士・弁護士会に対して一言お願いいたします。

「弁護士さんはこんな風に助けてくれる」ということを知らない人が世の中にはまだたくさんいると思うんです。社会的に弱い立場にある人たちに、弁護士はこんなあなたをサポートできる、ということをもっとアピールしていただいて、実際にいろいろやっていただきたいと思いますね。



プロフィール はら・ともなお

1966年生まれ。大学在学中よりジャズの演奏を始め、卒業後プロの道へ進む。近年、「一万人の第九コンサート」「佐渡裕ヤング・ビーブルズ・コンサート」等へのゲスト出演やテレビ番組「情熱大陸」でクラシックへの挑戦が紹介され話題となる。感情溢れる暖かい音色とエネルギッシュな演奏、熱いフレーズを聴かせるジャズトランペッターである。